

4

アトピー性皮膚炎

アトピー性皮膚炎は、かゆみのある湿疹がよくなったり悪くなったりを繰り返す病気です。赤ちゃんでは、生後2～3か月に発症することが多く、顔や頭の乾燥、赤み、ブツブツやかゆみから始まり、ひどくなると全身にひろがります。最初は、赤ちゃんにできる湿疹全体を指す「乳児湿疹」と区別が付きませんが、このような状態が2か月以上続くとアトピー性皮膚炎の可能性を考えます。お医者さんに相談してみましょう。

とにかく早く皮膚の状態をよくすることが必要です。乳児期にアトピー性皮膚炎がある場合、「アレルギーマーチ」といって、成長にともない食物アレルギーやぜん息、鼻炎などほかのアレルギー疾患を発症する確率が高くなることがわかっているからです。最近は「経皮感作」といって、傷んだ皮膚から食物やダニ、花粉などが侵入することにより、これらに対する「IgE抗体」を作り、アレルギー反応を起こすと考えられています。

治療としてはまずスキンケアが重要です。傷んだ皮膚から、汗やよだれ、洋服のこすれやペットのフケ、皮膚に常在している黄色ブドウ球菌などが皮膚を悪化させますので、こ

れらを落とすために1日2～3回、洗ってあげましょう。湿疹は顔にできることが多いので、顔もしっかり洗いましょう。低刺激性の石鹸をしっかりと泡立て、手で洗ってあげると、目に石鹸が入りにくく、肌にも優しく、洗浄力も期待できます。洗った後には十分に保湿して皮膚のバリア機能を補います。

以前は母乳を介して卵や牛乳を摂取することでアトピー性皮膚炎が悪化するといわれていましたが、お母さんまで制限食が必要な例は少なく、かえって赤ちゃんの栄養に悪い影響を及ぼすことがあり危険です。反対に卵やピーナッツは食べるのを遅らせることでアレルギー発症のリスクが高くなることが報告されています。食物アレルギーが気になる場合は決して自己判断せずかかりつけの小児科医に相談しましょう。

かゆみを抑えるためにはステロイド軟膏も必要です。ステロイドは、内服すると成長抑制などの副作用を心配しなければなりません、軟膏は外用薬ですので、医師に相談しながら適切に使用すればそのような問題はありません。むしろ皮膚の状態が悪いかゆくて眠れなくなりますので、成長ホルモン分泌への影響が心配です。

治療は、皮膚がつるつるになるまで続けましょう。治りが悪いと、バリア機能がさらに悪化し、皮膚症状もさらに進行するからです。みかけはよくなっても、実際にはまだ炎症が

残っている可能性があります。治療は勝手に中止せず、かかりつけ医と相談しましょう。

赤ちゃんの場合、1日複数回のスキンケアと軟膏による治療を十分に行えば、1～2週間でかなりきれいになります。アレルギー発症においても重要な時期ですし、なるべく早くに改善させてあげたいものです。



一口メモ

集団生活と感染症

母体からもらった免疫は生後6か月くらいでなくなり、次第に自分で免疫を作るようになります。しかし子どもの免疫を作る働きは未熟なため、保育園や幼稚園などで集団生活をはじめると様々な感染症にかかりやすくなります。

予防にはマスクや手洗いが重要ですが、子どもはなかなか上手にできないので、どんなに気を付けても感染を完全に防ぐことはできず、時に流行してしまうこともあります。

なるべく感染しない、他の人にうつさないためには御家族のご理解、ご協力も必要です。

また、集団生活の前に予防接種で予防できる病気は可能な限り予防しておきましょう。